

# 中高生を地域活動につなげる 新たな取り組み

～さいわいはっぴーボランティア「はび☆ボラ」～

幸区役所地域みまもり支援センター地域ケア推進課 主任 **山本 弘美**

## 1 はび☆ボラとは

### (1)事業開始の経過

本市では、高齢者や子どもをはじめ、すべての住民を対象とする川崎版地域包括ケアシステムの構築に向けて、全世代が住みやすい地域づくりに向けたさまざまな取り組みを進めている。

幸区役所でも「地域でつながり支えあう誰もが安心していきいきと暮らせる幸区」を目指して、職員がそれぞれ地域に出かけ、地域住民の方々と地域づくりを進めている。その中で、地域住民から出された課題について地区別に設定した担当者会議で職員がアイデアを出し合い、解決に向けた取り組みを実現する「地域課題解決プロジェクト」を立ち上げている。その話し合いの場で、地域活動をする方たちが高齢化し、若い世代の担い手が不足しているという課題が提起された。そして、解決に向けて、中高生が地域活動への興味を深め、その活動に経験できるようなボランティア活動メニューを区役所事業から提供するアイデアが出された。

川崎版地域包括ケアシステムでは、地域との関わりを深めるための1つとして、青少年期からのボランティア活動が提唱されている。この理念のもと、幸区役所では平成30(2018)年度から中高生を対象として、自分の暮らす地域への理解を深めるきっかけづくりの場として、「はび☆ボラ」(さいわいはっぴーボランティア)を始めた。

「はび☆ボラ」の基盤には、幸区社会福祉協議会ボランティアセンターが平成19(2007)年から実施してきたボランティアプログラム「チャレボラ(チャレンジボランティア)」がある。これは福祉分野を中心とした、学生(小学生～大学生)向けのボランティア体験プロ

ラムである。「はび☆ボラ」を実施するにあたっては、中学・高校生が「参加したい」と思う、より魅力あるプログラムを作るため、区社協職員(以下「社協」という。)と区役所職員(以下「行政」という。)が繰り返し議論を重ねてきた。

### (2)事業の意図

この事業の特徴として、中高生が地域でボランティア活動を経験してもらうことで、地域への関心が高まり、さまざまな年代の人と一緒に活動する楽しさを実感するところにある。地域で行われているさまざまな取り組みを知り、この事業を通じて興味を持つきっかけづくりとなることを期待している。また、このボランティア体験を通して、自分自身が地域の中で必要とされることにより、やりがいを感じ、地域で活動している人たちのことを知り、地域の一員としてどのようなことができるのか考える機会を作ることも期待している。そして、「はび☆ボラ」参加者が、将来的に地域活動の担い手として活躍し、この事業が住み慣れた地域で安心して暮らし続けることができる地域包括ケアシステムの構築に向けた取り組みへつながることを期待している。

### (3)社協との協働事業

この事業のもう1つの特徴は、幸区社会福祉協議会との協働事業としていることである。幸区では、これまでに「地域福祉計画」(行政計画)と「地域福祉活動計画」(民間計画)を、行政と社協が互いに議論しながら、一体的な計画として考え策定してきた経緯がある。区内の福祉課題に対し、行政と社協が対話を積み重ねることで、担当者間で気兼ねなく話をすることができ、また一緒に行動する土壌も形成されていた。住民は

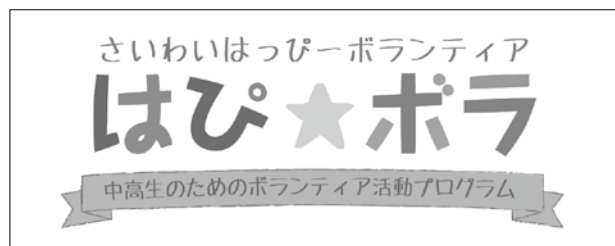
「行政」や「社協」というとらえ方ではなく、同じ「福祉」に取り組むメンバーとして私たちを捉えている。つまり、行政と社協は同じ目標の方向を向いており、互いに信頼関係を築きながらさまざまな取り組みを進めてきた。今回「はぴ☆ボラ」を実施するにあたっては、幸区役所が事業メニューの企画や広報物の作成を担い、社協は長年培ってきたボランティア受入のノウハウや参加者への傷害保険への加入や、社協が実施している「チャレボラ」の参加者へのアナウンス等を担い、それぞれが得意分野を持ち寄ることで事業をスタートさせることに至った。

## 2 平成30年度の取り組み

「はぴ☆ボラ」では、中高生が夏休み期間だけではなく、通年参加できるように前期・後期の2期に分けてメニューを実施している。

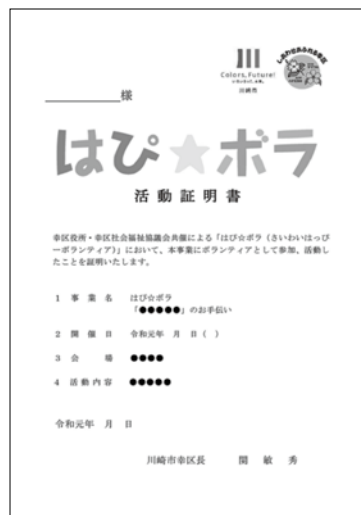
「はぴ☆ボラ」のメニューは、多くが既存の地域資源や取り組みを活用したため、リーフレット作成経費のみで実施することができている。事業実施にあたっては、中高生がこの事業に参加しやすくするため、ボランティア活動前に行う打合せ等をなくし当日の活動時間も3時間程度と短時間で気軽に参加できるメニューを用意した。また、メニューの内容について、子ども・歴史・自然・科学・環境・音楽といった多様なメニューを揃えることができたのは、「地域活動の担い手の高齢化」という地域課題を解決するため、若い世代の興味を引き付けるための部署間連携によるプロジェクトを立ち上げ、オール区役所として対応したことが大きい。

中高生が「参加してみたい!」と感じてもらえるように、「はぴ☆ボラ」に星マークを入れた独自のロゴマークや活動証明書の発行などのさまざまなアイデアを出し合った。また、活動証明書は幸区の区長名で、参加者一人ひとりの名前を記載して贈ることとした。



はぴ☆ボラロゴ

事業立上げ時には、短い準備期間で「はぴ☆ボラ」を成功させるため、区内の学校を訪問し教員や生徒な



はぴ☆ボラ活動証明書

どに丁寧な説明を行い、参加を呼びかけた。その成果もあり、初年度は全体で67名の参加があった。プログラムに参加した中高生67名へのアンケート結果からは、参加したきっかけについて、「自分から参加した」(42%)が最も多く、参加してみたの感想は「楽しかった」(23%)のほか、「社会勉強になった」(27%)、「地域活動に興味を持った」(19%)など、「はぴ☆ボラ」が中高生にとって魅力的で、地域に根ざした身近なプログラムであることが分かった。また、地域活動に参加していた方からは、「中学・高校生が地域の活動を知り、一緒に取り組むことで、地域の大人も元気をもらうことができる」という意見をいただいた。

## 3 令和元年度の取り組み

2年目の令和元年度は、中高生の多様な興味に対応するよう、平成30年度と同様に幅広い分野のプログラムを揃えるとともに、これまでになかった分野でも展開できないか検討してみた。障害・音楽・外国語など地域で活動している団体・企業等と連携したプログラムができるよう、さまざまな場所に出向き、「はぴ☆ボラ」の概要を伝え協力を依頼した。その結果、民間団体であるStudio FLAT（障害を抱える方のアート団体）との連携によりプログラムメニューの用意ができた。

「はぴ☆ボラ」の取り組みは始まったばかりだが、より地域に根ざしたメニューづくりを広げていくことが課題である。中高生が地域住民との関わりをさらに築き、その関わりを継続できるメニューづくりを進めると同時に、地域で活動している他の民間企業へも積極

的にアピールしていきたいと考えている。

広報リーフレットについては、SNS等で情報を得ることが当たり前の中高生にどのようにしてリーフレットを手にもってもらうかは頭を悩ませた。思わず目を引くデザインはどういうものなのか、実際中高生を対象にした雑誌・ポスター・ホームページ等を参考に試行錯誤した。結果、写真を上手に使い、文字はあまり使わないのが中高生にとって興味を惹くものだと分かった。参加者の活動の様子が伝わってくる写真を多く掲載し、リーフレットの表紙については、「はぴ☆ボラ」のイメージを固定化していきたいということもあり、大きな変更は加えず、何度も校正を繰り返し、担当として納得するものを作ることができた。

また、参加した中高生の感想・写真等をできるだけ多く掲載したいと考え、活動の様子や本人の表情ができるだけ伝わるように紙面の構成を工夫した。

この工夫により、保護者からは「リーフレットを楽しみにしております。」という嬉しい反響を頂いた。紙媒体の広報紙はどうか不安もあったが、対象が中高生なので、子どもが活動している写真が掲載されることをとても喜んでもらい、保護者やその周囲にもア

ピールできたことは、実際に保護者とのやり取りから実感することができた。

## 4 「はぴ☆ボラ」スタート

令和元年度は、7月から募集が始まりメニューもすぐに開始した。暑い中ボランティアに参加する生徒はいるのだろうかと半信半疑だったが、当日連絡なくキャンセルという中高生は一人もいなかった。申込から受入までは、本課が全て担当する訳ではなく、所管課へ協力依頼していたので全ての活動に実際関わった訳ではないが、私が一緒に参加した活動では、戸惑いや、恥ずかしいという気持ちを持ちながらも、全員が一生懸命に活動する姿を見ることができた。また、参加者も受入側も満足したという感想をもらったので一定の手ごたえはあった。



日吉あそびっ子クラブ2019でのボランティア活動



夢見ヶ崎動物公園でのボランティア活動

## 5 はぴ☆ボラを進めていくことで分かったこと

### (1) 将来に向けて必要な力

多くの企業が、就職を求める学生に対して重要視しているのが、筆記試験の結果ではなくコミュニケーション能力や、自らの発言に責任を持てるか、周囲の



はぴ☆ボラ リーフレット



意見を聴くことができるか、他人の発言を否定しないかということである。

「はぴ☆ボラ」のようなボランティア活動を通じてこのような能力を身につけることができると考えている。いつも居る学校というコミュニティを離れ、通常接することはない世代の人と関わることで、相手との距離感を意識したコミュニケーション方法を考えることで、「コミュニケーション能力の向上」や「自らの行動に責任をもてるようになる」ことにつながっていくのではないかと考えている。

## (2)さまざまな人との関わりから自己肯定感を高める

学校の中では、自分より勉強ができる人、スポーツができる人、頑張っている人が多くおり、認められたり褒められたりする経験をあまりしてこなかった生徒もいる。地域活動においてはさまざまな人との関わりから、一緒に参加する大人から感謝されたり褒められたりする経験を通じて自己肯定感を高め、同様の経験をjする仲間の姿を見て、より大きな成長をもたらすと考える。

## (3)広報に掲載されること

「はぴ☆ボラ」については、参加した中高生の活動を広く広報をしていこうと考えていた。その意義としては、自らの活動が多くの媒体で紹介されることで、広く評価を受けたと自己肯定感を促進するという目的があり、また保護者にとっても自分の子どもが評価されたという誇りや満足感を持つことにつながると考えていたからだ。

各学校の校長先生を初め、多くの方の協力もあった。特に市立川崎総合科学高等学校の皆さんから多くの参加申込があり、「はぴ☆ボラ」活動の紹介として「FMヨコハマ」「かわさきFM」のラジオ番組に取り上げられ、生徒3人に出演して頂いた。番組の中で、出演者した生徒さんが「自分のしたことが、こんなに喜ばれると思わなかった。」「人と関わるのが苦手だったが、活動した後自分はこんなことができるのだと思った。」とコメントしていた。

こうした活動経験を通じて、その時の思いや、達成感など振り返ることで、次に向けての課題や自分のす



FMヨコハマでの出演

べきことを認識し、また、新たな自分を発見することや、多くの人に認められたということが、参加者の自信につながり、次の活動への発展につながることを期待している。

今回のラジオへの出演は、この活動への参加に協力していただいた先生達も一緒に出演したので、その時の思いをもう一度生徒と共有できたことが良かったと考えられる。生徒の活動を取り上げることで、充実感とともに今後広く生徒に対しボランティア活動を推奨してくれることを期待している。

## 6 おわりに

「はぴ☆ボラ」がスタートしてまだ2年、正直本当に中高生がボランティア活動をしたいのか私には分からない。参加した理由も学校の課題だから、親や学校に薦められたからという声も多くある。夏休みでも部活動や夏期講習で忙しいのにせめて空いている時間は自分の好きな事を思い切りやりたいというのが本音ではないだろうか。しかし、重要なのは参加の理由ではなく参加してどうだったのかである。まずは参加してみようとして声かけしてくれる大人が周囲にいることが大切なのではないか。以前は、家や学校以外でも気にかけてくれる大人がいて気軽に声をかけられたのではないだろうか。そのような環境の中にいれば、もっといろんなきっかけを作ることができるのではないかと思う。今後も、この事業の担当として、中高生の地域活動への関心を高めるとともに、さまざまなことへの興味・関心を高める取り組みを進めていきたいと考えている。